

## 原南陽 医案④

一農家の子、廿歳ばかり。石尊詣でより帰りて、寒熱勞の如く、顔色衰瘦、腹満少気。衣の前を合せず、青絡脈乳下より扶容の辺糸瓜の如し。常に暗室に坐し、客を見ることを欲せず。脈微数なり。難治なり。ひそかに其の父に之を告げれば、其の父頗る才氣あるものにて、曰く、其の小病にあらざるを知る故に、遙かに枉駕を乞う。仮令死すとも、当国に於ては誰氏に託せんや。只薬を賜えば望み足れりと言う。

急にも死すまじと、厚朴七物湯を与えて去る。後に薬を乞うて曰く、余程快しと。予思うに前日断りたる故に薬を乞うの言葉なりと。又前劑を与う。又数日を経て再診を乞う。余先に難治と思ひ定めれば、再診するにも及ばずと答う。其の使頻りに快よき所を見せて加減を乞うと言う。故に辞を飾ると思えども、強いて命駕して行つて見れば、病者軽々と堂上に出迎う。予驚いて診すれば、腹満消して常の腹なり。寒熱やみて元氣清爽。近隣へ出て談笑すと言う。余り面目無く覚えども、宜しき方へ違いたる故、家人の歡喜言うばかりなし。馳走に遇いて帰りたり。何故に斯の如く早く治したるや今に於て解せず。